

1. はじめに

1963年に、私はカナダ・サスカチュワン州でソルト・インディアン社会の変動過程を調査した。その時、彼らの自殺率が全国平均の6倍と極めて高く、16-25歳層に限定すれば全国平均のほとんど8倍に達する事実ショックを受けた。調査地の自殺者の内訳を見ると、男性8に対して女性は2位だった。その時、どうして同じ政治的経済的社会的文化的環境の中で生活しながら、女性は自殺しないのかという疑問を持った。

その後、28年程カナダおよびオーストラリアの先住民を調査して来たが、この疑問は常に私の心の隅にあり、女性の問題を色々な角度から考えて来た。結論を先にいうと、白人社会との接触によって平準的だった先住民社会に新たに社会成層が台頭しつつあるが、それは「母親の学校教育に対する態度」が根本的な要因であることに気づいたのである。

2. 仮説

一般に「女性の意識と行為は特定社会の方向づけに影響をもつ」と考えられるので、この命題を農村に当てはめると、「若妻層の意識と行動とが農村変動の重要な内部的要因である」という仮説を抽出できる。ただし、これは将来の方向を予測する性質のものであって、未だ実証できる段階ではない。

3. データ

この発表のデータは、私が1968年以来お付き合い頂いている岩手県紫波郡紫波町志和地区において、1993年に5部落203農家における聞き取り調査である。

4. 結果の要約

- (1) 農業政策の問題、ムラの農業の問題、イエの農業の問題が、若妻層に「農家の農業についての不満」を醸成する。
- (2) イエ内における自律的条件の欠如と他律的条件の優越とが、若妻層に「農家のヨメになったことへの不満」を醸成する。
- (3) (1)と(2)から、若妻層は、「子供に農外就業を期待」するようになる。
- (4) 子供の農外就業は一応の学歴が必要なので、若妻層は「子供に進学を期待」するようになる。
- (5) 子供の進学期待は教育費の家計圧迫という形で現象し、若妻の農外就業が促進される。農外就業の職場で、非農家の職員と接触し、農家の生活と比較する。その結果(1)と(2)とが増幅される。
- (6) 子供は(1)がイエの中で話され、(2)を母親から聞かされるので、「農業について否定的な意識」を持つ。
- (7) 子供は(4)から「進学を期待されている」ことを知り、又、(1)と(2)とから本人も「進学を希望」する。
- (8) 子供は農業の経験もなく、当然農業の技術・知識もないまま「進学」するので、卒業後に農業を継ぐことは困難であろう。
- (9) その結果、子供は学校を出ると母親の期待通り「農外就業(離農)」することになるであろう。